

2025年度

# 国 語

2025年2月1日実施  
獣医学部 動物資源科学科

受験番号		氏名	
------	--	----	--

## 【注 意 事 項】

1. 試験監督による解答始めの指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は60分です。
3. この問題冊子は1ページから29ページまであります。
4. 解答は解答用紙(マークシート)の所定欄に記入しなさい。
5. 解答は所定欄に濃くはっきりとマークしなさい。その際、ボールペン・サインペン・万年筆等は使用してはならない。その他マークの仕方に関しては、解答用紙(マークシート)の注意事項をよく読むこと。
6. 試験監督の指示により、解答用紙(マークシート)に氏名(フリガナ)および受験番号を記入し、さらに受験番号および志望学科をマークしなさい。
7. 試験監督の指示により、問題冊子にも受験番号および氏名を記入しなさい。
8. 解答用紙(マークシート)は折り曲げたり、メモやチェック等で汚したりしないように注意しなさい。
9. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を高く挙げて試験監督に知らせなさい。
10. 試験終了後、問題冊子と解答用紙(マークシート)はともに机上に置いておくこと。持ち帰ってはいけません。

I 次の文章を読んで、後の問1～問11に答えなさい。

われわれが環境というとき、昔は環境というのは、あるもの、A生物学でいうときには、ある生き物（もちろん人間を含めて）の身の回りにあるものを環境ということになっていた。ドイツ語では、これをウムゲブング（Umgebung）、周りに与えられたもの、という言葉を使って表現していた。だから、独和辞典をひけば、Umgebung すなわち環境と書いてある。他の辞書で環境とひけば、英語ではエンヴァイロンメント（environment）、フランス語ではミリュー（milieu）あるいはアンヴィロンヌマン（environement）、ロシア語ではスリエダー（среда）と記されている。

英語のエンヴァイロンメントというのは、エンヴァイロン、すなわち周りをとりかこむものということである。他の言語でも同じことだ。つまり、周りをとりかこむもの、それをわれわれは環境といっている。そして、かつての「自然科学的」な認識では、X、温度は何度、湿度はどれくらいであって、空気の濃度はどれくらい、酸素の濃度、二酸化炭素の濃度はどうだなど、すべて数字で記述できるもの、それが環境であるというふうに使われていた。

そこには、草もある。それには、どういう草と、どういう草があつて、花が咲いている、どういう木がある、どんな石がある、等々、全部記述できるはずである。それが、そこに住んでいる動物の環境、客観的な環境である。こういう認識が、もつともこオーソドックスな環境の定義であつた。

しかし、注ユクスキュルはそうではないというのである。

彼が一九三四年、クリサートと共に著した「動物と人間の環世界をめぐる散策」という小さな本の中で、ユクスキュルはこれについて詳しく論じている。

その論調はきわめて理論的で、一読して簡単に理解できるとはいい難いが、①彼が例にとつたダニの話は、多くの人のひとに強い印象を与えた。森や藪の茂みの枝には小さなダニがとまっている。この動物は温血動物の生き血を食物としている。ダニは適当な灌木の枝先によじ登り、そこで獲物をじつと待つ。たまたま下を小さな哺乳類が通ると、ダニは即座に落下して、その動物の体にとりつく。

ダニには目がないので、待ち伏せの場所に登っていくには全身の皮膚にそなわつた光感覚に頼っている。哺乳類の皮膚から流れてくる酪酸の匂いをキャッチすると、②とたんにダニは下へ落ちる。酪酸の匂いが獲物の信号となるのである。

ダニがその敏感な温度感覚によって、自分が何か温かいものの上に落ちたことを知ったら、ダニは触覚によって毛の少ない場所を探し出し、口を突っ込んで血液を吸う。これでダニは食物にありつくことができ、その栄養によって卵をつくり、子孫を残す。

②この一連のプロセスは、生理学的に理解すれば、まず光、次いで匂い、そして温度、最後に触覚に対する機械的な反射行動の連続のよう

に思える。

そのように見れば、ダニは一つの機械にすぎない。けれどそこでユクスキュルは、ダニは機械なのか、それとも機関士なのかと問うのである。光も匂いも温度も接触もすべて刺激である。しかし、刺激というものは一つの信号ではあるけれども、それが主体によって知覚されたとき、初めて刺激となるものだ。

ダニはそれぞれの信号に対してそれを意味のある知覚信号として認知し、それに対し主体として反応する。その結果、ダニは食物を得、子孫を残していくのである。つまり、ダニは(3) 機械ではなくて、機関士なのである。

機関士としてのダニにとって、その環境にはさまざまなものがある。空気、空気の動き、光、日射ひざしによる温度、植物の匂い、葉ずれの音、いろいろな虫の匂いや歩く音、トリの声もするだろう。しかしそれらのほとんどすべては、ダニにとって意味をもたない。

ダニを取り囲んでいる巨大な環境の中で、哺乳類の体から発する匂いとその体温と皮膚の接触刺激という三つだけが、ダニにとって意味をもつ。B、ダニにとっての世界はこの三つのもので構成されているのである。

これがダニにとってのみすばらしい世界であると、ユクスキュルはいう。そしてダニの世界のこのみすばらしさこそ、ダニの行動の現実さを約束するものである。ダニが生きていくためには、豊かさより現実さのほうが大切なだとユクスキュルは考えた。

つまり、それぞれの動物、それぞれ主体となる動物は、まわりの環境の中から、(4) 自分にとって意味のあるものを認識し、その意味のあるものの組み合わせによって、自分たちの世界を構築しているのだ。

たとえば、イモムシであれば、今、自分が乗っている葉は、自分が食べるべき植物である。したがって、その存在は重要な意味をもつものと認識されている。しかし、そのほかの植物はこのイモムシにとって意味がない。食べられるものではないからである。そしてそれ以外に空気とこういうものは何ら認識する意味はない。結局、その葉っぱというものにだけ意味があるのであって、他のものは存在していないに等しい。

C、イモムシにもやはり敵がいる。ハチとかがこのイモムシを食べにくる。それは彼らにとって意味がある。そういうものがきたとき、彼らが落とす影や彼らの翅はねの動きが起こる。その空気の動きにイモムシたちが重大な意味を与えている。それは(5) 何というここのない、そよ風が起す空気の動きとはちがい、自分の命にかかわるものである。そのような意味をもつ空気の動きに対しては、彼らは身体からだをくねらして逃げようとする。あるいは、地面に落ちる。そうやって敵を避けようとする。

そういう意味のある存在を彼らは認識できるようになっている。

彼らの世界はほとんどこれらのものから成り立っている。たとえば、(5) 美しい花が咲いていようと、それは彼らにとっては意味がない。食物としても敵としても意味のないそのようなものは、彼らの世界の中に存在しないのである。彼らにとって大切なのは、客観的な環境といわれて

いるようなものではなくて、彼らという主体、この場合にはイモムシが、意味を与え、構築している世界なのである。

それが大事なのだと、ユクスキュルはいう。ユクスキュルはこの世界のことを「環世界」、ウムヴェルト (Umwelt) と呼んだ。ウムは周りの、ヴェルトは世界である。つまり、彼らの周りの世界、ただ取り囲んでいるというのではなくて、彼ら主体が意味を与えて作りあげた世界なのであるということ、ユクスキュルは主張した。

したがって、(6) 客観的環境 というようなものは、存在しないことになる。それぞれの動物が、主体として、周りの事物に意味を与え、それによつて自分たちの環世界を構築しているのである。そして、彼らにとつて存在するのは、彼らのこの環世界であり、彼らにとつて意味のあるのはその世界なのであるから、一般的な、客観的環境というものは存在しない。つまり、いわゆる環境というものは、主体の動物が違えばみな違つた世界になるのだというのである。

たとえば、このいわゆる客観的な環境であるちよつとした林の中に、一羽のトリがいたとする。トリから見ると、どの木が、なんと名前前の木か、いつ頃実がなるかということ、その時点にしてみると意味がない。なぜならこのトリは、木の実を食べない。虫を食べる。虫を食べるトリにとつて、存在するもので意味のあるのは、ひとつは敵であるが、もうひとつは自分の食べ物である。その食べ物には虫である。しかも、このトリは生きた虫を食べる。そのため、Y。

それは生きているからである。動かないものは意味がない。それは石ころかもしれないし、死んだ虫かもしれないし、そんなものはそのトリは食べない。そうすると、動いていなければだめだということになる。

その小さな虫は、動いているときにだけ、このトリの目に見える、存在するものとして認識される。そして、そのトリは、それをつついて食べようとする。そうやってそのトリは生きている。周りには動かないものはいっぱいあるけれど、そのトリにとつては意味がない。彼らにとつてそのような世界は存在していないに等しいということになる。つまり、主体の動物にとつて意味のあるのは、その主体の動物の世界を構築しているものだということである。

(日高敏隆『動物と人間の世界認識 イリュージョンなしに世界は見えない』筑摩書房)

(注) ユクスキュル——エストニア出身のドイツの生物学者、哲学者 (一八六四—一九四四)。

\*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問1 傍線部（ア）～（ウ）の言葉の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は  ～ 。

（ア）オーソドックスな

- ① 概念的な
- ② 正統的な
- ③ 散文的な
- ④ 不変的な
- ⑤ 教条的な

（イ）とたんに

- ① そのために
- ② その瞬間に
- ③ その反動で
- ④ そのままに
- ⑤ その途中で

（ウ）何ということのない

- ① たいしたことのない
- ② めったに起こらない
- ③ 目にするものがない
- ④ だれにもわからない
- ⑤ まったく関係のない

問2 空欄  ～  を補うのに最も適当な言葉を、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度用いてはなら

ない。解答番号は A・、B・、C・。

- ① いみじくも      ② とくに      ③ しかし      ④ いうなれば      ⑤ ましてや

問 3 空欄  を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 環境を記述することは困難であり  
 ② 環境は形而上学的存在であつて  
 ③ 環境を対象化することはなく  
 ④ 環境を人間は捉えることはできず  
 ⑤ 環境は客観的に存在するもので

問 4 傍線部(1)「彼が例にとつたダニの話は、多くの人びとに強い印象を与えた」とあるが、ダニの話のどのような点が強い印象を与えたのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 外部から与えられるさまざまな知覚信号に対し、反射行動を繰り返すだけのダニは、機械にすぎないのか、それとも機関士なのかと問い、機関士であると結論づけた点。  
 ② われわれにとつての環境とは数量化が可能な世界であるが、ダニにとつての環境とはそのようなものではなく、そこではすべての存在が茫然ぼうぜんと広がっていると指摘した点。  
 ③ 世界に存在するすべてのものが環境として等しく認識されるというわけではなく、したがって、ダニの環境は人間の環境とまったく無関係に成り立つということを明らかにした点。  
 ④ 森や藪の中に生息するダニという身近な下等生物についての話であるにもかかわらず、その内容が非常に観念的であり、一読しただけでは理解することが困難であつた点。  
 ⑤ ダニにとって意味のあるものは、哺乳類の体から発せられる酪酸の匂いと体温、皮膚で感じる接触刺激だけであり、その三つのものからダニの世界は構成されていると論じた点。

問5 傍線部(2)「この一連のプロセス」に含まれないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 酪酸の匂いをキャッチする
- ② 枝の下に落ちる
- ③ 動物の体にとりつく
- ④ 口で血液を吸う
- ⑤ 子孫を残す

問6 傍線部(3)「機械ではなくて、機関士なのである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① すべての感覚信号にしたがって反射的に行動しているということ。
- ② 巨大な環境の中に埋め込まれた一部ではなく、環境を構成する一つの主体として、周囲を知覚しながら生きているということ。
- ③ 環境の中にあるものに依存して行動を決定するのではなく、環境からは独立し、一個の主体として行動を決定するということ。
- ④ 信号に対して一連の反射行動をしているのではなく、それを知覚信号として認知し、その上で主体として反応しているということ。
- ⑤ 光や匂い、温度などを刺激として感覚するだけでなく、同時にそれらを意味のある知覚信号として主体的に認知しているということ。

問7 傍線部(4)「自分にとって意味のあるもの」の具体例として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 酪酸を発する哺乳類にとっての、ダニ。
- ② ハチにとっての、葉の上にいるイモムシ。
- ③ 虫を餌とするトリにとっての、木の実。
- ④ 藪にいるダニにとっての、反射運動。
- ⑤ イモムシにとっての、食べられない植物。

問8 傍線部(5)「美しい花が咲いていようと、それは彼らにとっては意味がない」とあるが、なぜそのようなことになるのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① イモムシにとって植物は、ただ食べられるものとして客観的に存在する限りにおいて問題となるのであるが、美しいかどうかということは、むしろ主観的な問題であるから。
- ② 植物を食べて生きているイモムシにとっては、それが美しいかどうかということはまったく問題にならず、ただ食べられるかどうかということだけが意味をもつから。
- ③ 葉っぱを食物としているイモムシは、そもそも花を食べられるものとして認知していないというだけでなく、ましてや花が敵になるようなこともありえないから。
- ④ 美しい花はイモムシにとって食物でも天敵でもないため、主体に影響を及ぼすものとして認知されなければならず、そもそも花の美しさは客観的な評価になじまないから。
- ⑤ 敵から身を守ることを行動原理としているイモムシにとって、美しい花が咲いたとしても、それが敵を避ける上で重要な意味をもつようなことは絶対ないから。

問9 傍線部(6)「客観的環境というようなのは、存在しないことになる」とあるが、そのように言えるのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① それぞれの動物は主体として、周囲に存在する事物に意味を与え、その意味のあるものにもとづいて自分の生きる「環世界」を構築するのであり、すべての動物に等しく意味をもつ環境というものは成立しえないから。
- ② それぞれの動物は自分が置かれた「環世界」に適応しながら生きていくが、どのようなものにもどのような方法で適応するかは、動物によって異なっており、その意味で、環境はすべての動物に対して普遍的にあるわけではないから。
- ③ それぞれの動物は、広大無辺な「環世界」の中に点在するように生息しているのではなく、限られた物理的な環境の中で、主体的な生を営みながら生息しているのであり、また、その生物学的な生態も動物によって異なるから。
- ④ それぞれの動物は「環世界」の中で、意味のある知覚信号に対する反射行動を繰り返して生きるが、何を知覚信号として認知するかは動物

によって異なるので、一律に意味をもつ環境というものの自体が成り立たないから。

- ⑤ それぞれの動物は一個の主体として環境にかかわり、意図的に事物に意味を与えながら自分の世界を作り上げるのであり、すべての動物が同じ意味を見いだすことのできる「環世界」などというものは、現実にはありえないから。

問10 空欄 Y を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 意味のある動きをする必要がある
- ② 動くものにはすべて意味がある
- ③ 意味のないものも動くことはある
- ④ 動きそのものには意味がない
- ⑤ 動いているもののみ意味がある

問11 次に示すのは四人の生徒が本文を読んだ後に、二重傍線部を踏まえ本文の内容について話している場面である。空欄 甲・乙に入るものの組み合わせとして最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

生徒A——私たち人間も含めて、動物は環境の中で生きていくよ。しかも、生まれてくる環境を選ぶことはできない。

生徒B——そうだよ。でも、環境を選ぶことはできなくても、人間は意志をもって生きていくことができる。二重傍線部は、そのような人間のあり方も含めて指摘しているんじゃないかな。

生徒C——それは疑問だな。そもそも、本文は人間のあり方について論じているのではないよ。たしかに、本文の冒頭では 甲 に言及しているけど、それはその後で動物にとつての環境の意義について論じるためのものだよ。

生徒D——うん。筆者がユクスキュルの提起した議論を取り上げているのも、そのためだよ。

生徒C——筆者は特に、ユクスキュルのダニの話に注目しているけど、それを読むと、二重傍線部にある「主体」との関連も見えてくる。

生徒B——つまり、どうということかな？

生徒C——乙

生徒B——なるほど、二重傍線部で指摘されていることは、そういうことだったのか。

生徒D——そうならば当然、動物によって世界は異なるということになる。それをユクスキユルは「環世界」という言葉を用いて表現しているのさ。

生徒A——そういう意味で、人間も自分の世界の中で「主体」として生きているということになるんだね。この文章はすごく勉強になったよ。

- ① 甲 人間を主体に置いた環境の定義  
乙 ダニのような生き物でも立派に「主体」として生きているのさ。それなのに人間は環境に左右されるし、なかなか主体的には生きられないということだよ。
- ② 甲 もっとも客観的とされる環境の定義  
乙 ダニであっても世界の「主体」なのさ。つまり、ダニの世界はダニにとって意味のあるもので構成されていて、無意味なものも最初から存在しないということだよ。
- ③ 甲 いわゆる自然科学的な環境の定義  
乙 ダニもまた「主体」として、自分の世界を作り上げているのさ。しかも、その世界は「主体」として意味のあるものだけで構成されているということだよ。
- ④ 甲 環世界として規定される環境の定義  
乙 ダニをはじめとして、あらゆる生き物はこの世界の「主体」として存在しているのさ。だからこそ、私たちの人生も意味のあるものになるということだよ。
- ⑤ 甲 各国語によって異なる環境の定義  
乙 ダニは環境によっては「主体」にもなりうるのさ。もちろんそれはダニに限らず、私たち人間もそうであって、だからこそ環境は重要な意味をもつということだよ。

II 次の文章は、精神科医である筆者が睡眠の習慣について考察したものである。これを読んで、後の問1～問8に答えなさい。

言うまでもなく、「規則正しい生活」とは、毎朝決まった時間に起きて、決まった時間に食事をし、決まった時間にシユウシンし、一定の睡眠時間を確保することを指しているわけですが、まずは、ここで基準となっている「時間」というものについて考えてみましょう。

現代に生きる私たちにとっては、腕時計も壁掛け時計も当たり前のようであつて、スマホにもPCにも時間表示があり、「時間」を正確に知ることは実に容易です。もちろん、目覚まし時計もあるし、スマホ等のアラームで起床時間を決めることもできます。

しかし、このように時計が整備されたような環境は、一体いつからあつたのでしょうか。

時計がここまで万人にとつて身近な存在になつたのは、悠久なる人類の歴史において、かなり最近のことに過ぎません。

古代から日時計などはあつたものの、それは人々の生活に今日のように浸透したものではありませんでしたし、中世になつても、都市の中心にある教会などの時計台や「カネ」によつて、大まかな時間を知る程度のことしかできなかったのです。

その後、家庭の中に振り時計などが置かれるようにもなつていきましたが、やはり人々に時計が密接な意味を持ちはじめたのは腕時計の登場以降でしょう。

腕時計が初めて開発されたのが19世紀初めで、一般的に人々に普及したのは何と、第二次世界大戦以降なのです。

『遅刻の誕生』(橋本毅彦・栗山茂久 共著)という本によれば、時間に対する厳密さが人々に求められるようになったのは、鉄道のダイヤ運行の必要があつたためだつたようです。それにしても、この本の書名からもわかるように、現代人が恐れる「遅刻」という概念すら、昔はなかつたわけですね。

いずれにせよ、Xことは間違いありません。

また、わが国においては長らく、日の出から日の入りまでを6等分した不定時法という時間が用いられていたようで、何と、季節によつて1時間の長さ自体が伸び縮みさえしていたのです。

このように考えてくると、生活に密着したものである「時計の歴史」自体、かなり日が浅いのですから、「規則正しい」にこだわるような考え方の歴史も、ごく歴史の浅いものなのです。

「規則正しい生活」を推奨する考え方の人は、必ずや「規則正しい睡眠」が大切だと言い、できれば7～8時間の睡眠が望ましいとか、PM 10:00～AM 2:00が睡眠のゴールデンタイムだといった説を主張していることが多いものです。これらが根拠薄弱な俗説にすぎないことは、昨今、さまざまな実験で明らかにされてきていますが、それでも未だに、「まとまった睡眠をとることが望ましい」と考えている人は、決して少なくない

いかもしれません。

(1) アマゾンの奥地に居住するピダハンという少数民族がいます。驚くべきことに、この民族は、まとまって寝るといふことをしません。一度に2時間程度の睡眠を何度も昼夜問わずとるのですが、それを皆で交代交代にするような生活をしている。つまり、彼らにとっては断眠が普通なのです。

アマゾンのジャングルで暮らす彼らにとって、まとまった時間寝てしまうことは、とても危険なことなのです。なぜなら、ジャングルに棲息する毒蛇やら猛獣やらが、いつなんどき襲って来るかわからないのですから。彼らのおやすみのあいさつは、「寝るなよ、ヘビがいるから」という言い方なのです。

このピダハンの例はあまりに極端なものかもしれませんが、それでは、スペインやイタリアなど世界各地で広く行なわれているシエスタはどうでしょう。これは、帰宅してゆつたりと昼食を楽しんだ後に数時間程度とるお昼寝の習慣なのですが、彼らはその分宵<sup>よ</sup>張り<sup>り</sup>で、夜の睡眠時間は短めです。

日本でもその昔、お昼寝は少なからず当たり前の習慣であったのです。農家などでは特に、陽の高い真昼は直射日光が激しくて仕事にならないので、お昼寝をして A を養っていたわけなのです。

このようにいろいろ考えてみると、睡眠についても、私たちはもつと柔軟に捉えて良いのではないかと思うのです。

特に精神科医が問題視することが多いのは、「昼夜逆転」です。そんな生活リズムを放置しておいたら治らないし、治っても会社や学校に行けなくなってしまうのではないかと。しかし、これも根拠のない、誤った思い込みにすぎません。

状態が良くなってくると、特別に意図して努力などせずとも、自然に昼夜逆転は解消してきます。また、状態が改善して復職や復学が決まると、復帰当日からそれに合わせたリズムに身体は戻してくれるのです。

むしろ「昼夜逆転」が起こっている場合に考えなければならぬのは、(2) その現象がなせ起こっているのかという「意味」なのです。

これまで多くのケースを診てきて、一つ確実に言えることは、「昼夜逆転」が心理的な防衛反応の一つであるということです。考えてみれば当たり前のことなのですが、精神的に不調で自宅療養せざるを得ないクライアントにとって、世の中の人たちが仕事に従事したり、学校に行つて学業に励んでいるような日中に、特にすることもなく気力もない状態で、漫然と家で過ごさなければならぬのは、かなり精神的拷問に近いものです。活動的な世の中の人たちと動けない自分を比べてしまつて、劣等感や罪責感に苦しめられてしまいがちです。ですから、そんなヒリヒリする日中の時間を、寝てやり過ごしたくなるのは実にもつともなことなのです。

逆に、世の中の人たちが休んでいる夜中の時間は、そのような精神的苦痛を感じにくい穏やかな時間なので、かえって起きていたくなるので

す。  
このような「昼夜逆転」の「意味」を読み取り、その心理に丁寧にアプローチすることをなおざりにして、ただ「昼夜逆転」はよろしくない

と指導するのでは、治療自体が一体何を目指しているのか、理解に苦しみます。  
しかも、さらに問題なのは、眠くない夜に「寝るべきである」として睡眠剤を投入し、眠くてだるいという日中には「Y」といった指示をすることによって、患者さんの「頭」による「心⇄身体」へのコントロールを強化してしまい、表面上の生活リズムは整えられても、内面的には状態が悪化してしまうことです。そもそもが、「頭」の意志力による過剰な「心⇄身体」へのコントロールが引き起こした病態であったにもかかわらず、治療の名において再び「コントロールせよ」と指示することは、どう考えても「治療ならざる治療」なのではないでしょうか。

実際、このような意図で睡眠剤を用いても、あまりうまく効かないことがほとんどで、それでも力づくで寝かせようとすると、かなり多量の薬剤を必要としてしまうことになります。また、その薬剤のハングオーバー（持ち越し）によって、翌日の日中はより激しい眠気との戦いをするしなければならず、その眠そうでぼんやりした状態を診て、「まだ治っていない」と診断されてしまう。これでは「出口なし」の悪循環です。

また、そもそも「規則正しい生活をしなければ、治らない」という考え方は、③論理的な観点からも、かなり怪しいものであると思います。私の長年の臨床経験からはつきりと言えることは、「治った人は、規則正しい生活になっていることが多い」ということだけです。これを、話をシンプルにするために、とりあえずここでは「治った人は、規則正しい生活になる」として考えてみましょう。

「治った人」をAとし、「規則正しい生活になる」をBとして、「ならば」を↓で表したとすれば、この臨床的事実はA↓Bという論理式で表すことができます。

基礎的な論理学では、A↓Bが真である場合に成り立つのは唯一、「対偶」と呼ばれるnot B↓not Aだけです。つまり「規則正しい生活になっていないのならば、まだ治っていない」ということです。

B↓Aは「逆」と呼ばれるもので、「逆は必ずしも真ならず」といわれているように、成り立つとは限らないものです。つまり、「規則正しい生活になったならば、治った」とは言えないのです。よって、意志力で頑張ったり薬物を用いて「規則正しい生活」をしたとしても、「治った」状態になっているかどうかには、直接関係がないわけです。

また、not A↓not Bは「裏」と呼ばれるもので、これも「逆」と同様で「裏も必ずしも真ならず」であって、「治っていない人は、規則正しい生活をしなかった人だ」という論理も成り立ちません。

また少々ややこしいのですが、元のA→Bは、「治った人」のことについて述べていただけであって、そもそもどうすれば「治る」という話ではありません。にもかかわらず、西洋医学ではあちらこちらで、このようなすり替えが平然と行われてしまっています。

身近な例を挙げてみると、「風邪が治った人は、熱が下がっている」とは言えても、「熱を下げれば、治る」わけではありません。しかし、この過ちに気付かず、解熱剤を処方することが治療だと思いついて入っている医師もいるのです。

同様に、「精神的に不調だと、不眠になることが多い」という現象の観察から、性急に「不眠を解消すれば、精神的な不調も治る」という誤った結論を導き出してしまって、やたらに睡眠剤を処方してしまったりする精神科医も少なくありません。

この種のすり替えは、つまり「症状が消えれば、病気が治る」というBした信念を生みだしてしまい、現代医療の大きな問題点でもある「対症療法の氾濫」を引き起こしている一因であると言えるでしょう。

それにしても、科学の一分野としての矜持きやうじを持つべき医学が、高校で習うレベルの初歩的論理学すら分かっていないような過ちを犯して、その問題に気付かないというのは、かなり「はずかしいことではないかと思うのです。

(泉谷閑示『心と身体』の声を聴く』青灯社)

\*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の漢字と同じ漢字を用いるものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は  ～ 。

(ア) シュウシン

- ① 不安をイツシユウする。
- ② シュウモンを改める。
- ③ 事態のシュウシュウを凶る。
- ④ 前例をトウシュウする。
- ⑤ 新知事がシュウニンする。

(イ) カネ

- ① 時期ショウソウの感がある。
- ② 記者がワンショウを付ける。
- ③ 修正案をイツショウに付す。
- ④ 利害がショウトツする。
- ⑤ 世にケイショウを鳴らす。

(ウ) ハズかしい

- ① 升セツな物言いをする。
- ② ひどい升ジヨクを受ける。
- ③ ジヨウスイ升に水を貯える。
- ④ 人前でグ升をこぼす。
- ⑤ 大波が升ヂに砕け散る。

問 2 空欄  ・  を補うのに最も適当な言葉を、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は  ・ 。

- |   |   |   |    |   |    |   |    |   |    |   |    |
|---|---|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| A | 4 | ① | 運氣 | ② | 鬼氣 | ③ | 平氣 | ④ | 快氣 | ⑤ | 英氣 |
| B | 5 | ① | 昇華 | ② | 透徹 | ③ | 倒錯 | ④ | 逸脱 | ⑤ | 深化 |

問3 空欄 X を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 時計の時間によって人々の生活が規定されるようになったのは、かなり最近のことである
- ② 「規則正しい生活」は人々が遅刻を恐れるようになったことによる、偶然の産物である
- ③ 戦争が終わって人々に時間的な余裕ができてはじめて、遅刻が問題にされるようになった
- ④ 人々が常に時計を気にして暮らすようになったのは、第二次世界大戦の影響が大きい
- ⑤ 時間を正確に知ることができるようになるには、技術の発展を待たなければならなかった

問4 傍線部(1)「アマゾンの奥地に居住するピダハンという少数民族がいます」とあるが、筆者がピダハンを取り上げたのはどうしてだと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 「まとまった睡眠をとることが望ましい」という考えは信ずるに値しないものであるということを、そのような考えを信じていない人々が存在することを示し、実証するため。
- ② 「まとまった睡眠をとることが望ましい」という俗説が根拠薄弱であるということを、まとまった睡眠をとらなくても十分に健康な人々の存在にあえて言及し、間接的に指摘するため。
- ③ 「まとまった睡眠をとることが望ましい」とよく言われるが、必ずしもそうではないということを、断眠を日常としている人々の生活を紹介し、事実即したかたちで示すため。
- ④ 「まとまった睡眠をとることが望ましい」と未だに言われるが、そのような考えは時代遅れであるということを、長時間眠ることをしない人々の存在に触れ、示唆するため。
- ⑤ 「まとまった睡眠をとることが望ましい」とは考えていない人々が世界には実際にいるということを、短時間の睡眠を何度もとる生活をすすめる人々を例に挙げ、明らかにするため。

問5 傍線部(2)「その現象がなぜ起こっているのか」とあるが、筆者はこの点についてどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 自宅療養をせざるを得ないほどの精神的な不調を生じた人々は、そのことに対する劣等感や罪責感から、昼の時間を寝てやり過ぎそうとする。逆に、世の中が静かになる夜中には眠ることができるようになるので、結果として「昼夜逆転」が起こる。
- ② 精神的に不調に陥った人々は、「まとまった睡眠をとることが望ましい」ということはわかっているが、不安を感じやすい夜中には十分な睡眠をとることが困難になるが、逆に、昼間には穏やかに眠ることができる。そのようにして、「昼夜逆転」は起こる。
- ③ 劣等感や罪責感に苦しめられている人々は、世の中と同じように行動することに對して不安や苦しみを感じる一方で、本来眠る時間である夜に活動し、逆に、活動する時間である昼に眠るようになる。多くはそのような事情から、「昼夜逆転」が起こる。
- ④ 精神に不調をきたした人々は、世の中が活動的である昼間に劣等感や罪責感にさいなまれやすく、そのため寝てやり過ぎそうとする心理的な防衛が働く。逆に、夜中には精神的に穏やかでいられるので起きていたくなくなり、その結果、「昼夜逆転」が起こる。
- ⑤ 精神的に不安定になった人々は、昼の時間に動こうとすることに苦痛を感じる一方で、寝ることによって夜になるのを待つことになる。逆に、夜になれば精神的に穏やかになるので、何事もなかったかのように活動することができ、結果的に「昼夜逆転」が起こる。

問6 空欄 Y を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 許可があるまで眠ってはいけません
- ② 眠いときは眠るようにしてください
- ③ 夜に眠れなくなるから寝てはいけません
- ④ 睡眠剤を服用してはいけません
- ⑤ 楽な姿勢で横になってみましょう

問7 傍線部(3)「論理的な観点からも、かなり怪しい」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① 「規則正しい生活になっていないのならば、まだ治っていない」という命題は真として成り立つが、その裏である「治った人は、規則正しい生活になる」という命題は必ずしも真とはならないため、「規則正しい生活をしなければ、治らない」と言い切ることはできないから。
- ② 「規則正しい生活をしなければ、治らない」と言われることがよくあるが、筆者の経験上、「治った人」と「規則正しい生活をする」ということを関連させるような臨床的事実はなく、したがって、そのような言説は論理としても成り立たないということになるから。
- ③ 「規則正しい生活をしなければ、治らない」というのは、よく言われるように事実ではあるが、そうかといって、「規則正しい生活になる」ということと「治った」状態との間に、直接的な因果関係があるということは、筆者の経験からしても認めることができないから。
- ④ 「治った人は、規則正しい生活になる」という命題が仮に真であるとしても、逆の「規則正しい生活になったならば、治った」という命題は必ずしも真にはならず、そうである以上、「規則正しい生活をしなければ、治らない」という考え方も必ず真となるわけではないから。
- ⑤ 「治った人は、規則正しい生活になる」という命題が真である場合、その対偶である「規則正しい生活になっていないのならば、まだ治っていない」という命題も真として成り立つが、その逆である「規則正しい生活をしなければ、治らない」は真とはならないから。

問8 次のア～オについて、筆者の考えと合致するものは①、合致しないものは②を選び、それぞれ記号で答えなさい。解答番号は

15。

11

- ア いかなる臨床的事実も、論理式を用いて表すことは不可能である。
- イ どう睡眠をとるかということにおいて、絶対的な規範など存在しない。
- ウ 不眠を解消したからといって、精神的な不調が治るわけではない。
- エ 「規則正しい生活」が喧伝されるようになったのは、最近のことである。
- オ 人間に起こる心理的な防衛反応を治療しようとしても、無駄である。

15 14 13 12 11

Ⅲ 次の文章を読んで、後の問 1～問 11 に答えなさい。

「身体の消費」現象を俯瞰ふかんすると、われわれは、身体に「ままつわる問題に直面する。それは、人間の身体の「モノ化」である。ここでいう「モノ化」には二つの意味があるといえる。

第一に、身体という存在の客体化 (objectification) としての「モノ化」である。身体が、意思の宿った人間の主体 (subject) の表象としての存在から、意思の外に出され、制御できる物体、すなわち客体 (object) とみなされるようになることである。

(注1) 巨明志は、身体の社会形式を、次の二つの「命題」に分類している。

- ① 人間は身体である (being としての身体)  
 ② 人間は身体を持っている (having としての身体)

人間は、人間として存在するために、生命としての身体を与えられている。身体に対して何らかの外圧を加えれば、生命の A に支障をきたす可能性もある。それゆえに、身体は、自然のままに存在させておかなければならない。あるいは、存在していることが自然だと考えられている。

しかしながら、(注2) デカルトの有名な「身体—精神」の二元論にあるように、人間は、身体を所有する存在でもある。所有するということは、人間の精神 (意思) から見たとき、各個人は、自らに属している身体を、外的な存在、すなわち客体とみなしていることになる。

亘が掲げる身体をめぐる二つの「命題」は、人間が「X」という、身体をめぐるある種の (注3) コンフリクトを産み出している。

「身体でしかない」はずの人間が、精神 (意思) という主体を切り離すことで、様々な技術さえあれば、自らが所有する身体を意のままに制御することができる可能性が生じるのである。そして、この可能性の裏には、身体を「モノ化」し、身体を意のままにすることに対する (イ) 禁忌が見え隠れしている。

第二に、経済活動における消費の対象となる商品としての「モノ化」である。これは、客体化としての「モノ化」を経由して生じる「モノ化」である。人間の意思、主体と切り離された身体が客体化することによって、物体とみなされた身体は、まさに消費の対象となる。その結果、身体は、名実ともに「モノ」、すなわち商品として消費される対象となるのである。

特に、(注4) ジャン・ボードリヤールの議論を踏まえると、現代の消費社会では、(ウ) 身体を消費すること、すなわち身体を意のままに制御することは、ある種必然なことだといえる。消費社会では、消費者は、商品のいわば記号的な側面、商品に意味づけられた記号に対して価値を見出

し、消費の対象とする。商品に意味づけられた価値を消費する、いわゆる「記号を消費する」というとき、消費者は、ボードリヤールの言葉を借りれば「もはや存在しない個性」、言い換えれば、商品が包含する記号によって表現された個性を消費するのである。

消費者にとって、個性を表現するための媒体が身体であることはいうまでもないだろう。衣服のファッションがその典型であるように、消費者は、自らの身体に衣服を着せるといふ、身体への施しを通して個性を表現しようとする。衣服は、皮膚を保護する機能的な商品ではなく、むしろ「第二の皮膚」として、身体と一体となり身体の形相やイメージをデザインしていく。【①】衣服という、個性を表現するための意味が含まれた記号としての商品を自らの身体にまとい、衣服をまとった身体によって表象されるイメージを発信する行為を、消費者は消費しようとする。このとき消費されるのは、もはや衣服という商品ではなく、自らを消費の対象として身体を意のままに操り、自らの身体イメージを【B】する行為そのものである。

この意味において、衣服をまとう行為の先には、②身体そのものを変形、加工させる「変工」という行為があるといえる。そもそも、身体を「変工」させる行為は、様々な呪術や儀礼などの「文化人類学的な主題」であり、客体化はおろか、経済学的な主題、すなわち消費される行為とは異なる次元の問題として捉えられてきた。しかし、消費社会におけるファッションのモードの中で、身体「変工」自体が、記号化した衣服をまとうことと同様の次元の行為となるのである。

身体の「モノ化」における二つの意味の中で、社会の中でどちらがより強く意識されてきたのかといえば、商品として消費される「モノ」としての意味だといえるだろう。確かに、近代医療における外科手術のような、医療としての身体「変工」＝「医療的身体変工」が発達する中で、人間は、生命はもちろん、生活の質(QOL)を失うことなく、身体を「変工」できるようになった。このような「医療的身体変工」の経験(あるいは疑似的経験)は、人々の身体感覚を変化させてきたといえるだろう。【②】まさに、亘がいうところの「havingとしての身体」のような、各人の意思や人格からの切り離しと、それに伴う身体の制御可能性と制御可能な身体に対するイメージへの意識が広まっていったのである。

ただ、身体の「変工」技術の発展によって、身体の「モノ化」という意識が顕在化してきたわけではない。問題は、その技術を用いて可能になることが消費の対象となることである。つまり、医療行為としての美容整形という「変工」、そして「文化人類学的な主題」のもとにあるピアッシングやタトゥーなどのような直接的な身体「変工」は、身体の形相をつかさどる「第二の皮膚」である衣服のファッションのように、医療行為を伴わない身体「変工」と同等な次元のものとなる。③このことこそが問題なのである。

衣服のファッション、あるいはそのモードを追いかけ消費することは、衣服が表象する記号を媒体にして、(自己)表現という言語活動をおこなうこと、そして、消費者自身の個性を表象することである。このような消費社会に典型的な消費現象は、資本主義の発展や進化を背景に顕在

化してくる。そして、資本主義経済の発展は、人々の欲望を社会の「内」に向かわせる。社会の「内」、つまり「資本主義自身が、人々の欲望を作り出して」いくような資本の運動が起きてくるのである。【③】いわば、欲望の「個性化」であり、カスタマイズ化である。

(注5) 佐伯啓思の言葉を借りれば、そのようにして「個性化」した欲望は現代の消費社会において限界に達し、「欲望のフロンティアは、消費者ひとりひとりのナルシズムにかかっている」のである。この「ナルシズム」が消費者にとつての欲望の対象となるとき、消費者は身体を消費するのである。

身体が、人間の存在、そして自己を表象するものであるとするならば、人々は、自身の欲望のままに身体を「変工」、管理、制御しようとするだろう。【④】ただ、身体を「変工」、管理、制御できる技術的可能性が出てきたとしても、人々はそれが容易にできなければ、自ら所有する身体を「変工」することはないだろう。

例えば、「身体消費」に関連する事例から考えてみよう。社会の近代化の中では、例えば都市化などによって人々が集中して生活することから、都市では疫病などが発生する可能性があった。実際、様々な伝染病の大流行があり、多くの死者を出していることは歴史的な事実としてある。そこで、公衆衛生という考え方が必要となるのだが、公衆衛生の秩序を保つためには、当然のことながら、個人レベルに対する啓蒙けいもうが必要となる。実際、様々な啓蒙活動がなされるわけであるが、そのとき、例えば国家による「政治的」な啓蒙活動以上に効力を【C】したのは、実は「経済的」な資本の力だといえる。

確かに、人々は自分自身が病気になるために、身体を管理する必要があった。ただ、それはやはり、「節約的」(economical)に行われていたはずである。すなわち、人々は、啓蒙活動によってもたらされた衛生観念を享受していても、必要最小限の身体管理にとどめ、身体に対して「過剰な」管理や制御を積極的に行う必要はないはずである。一般の人々は、衛生観念の背景にある自然科学的な知識を持っている、あるいは知識を得ようとすることはほとんどない。いや、そもそも、衛生観念のあり方自体が、一般の人々にとってはブラックボックスとなっているのである。

資本は、消費者がおかれているそのような状況を背景に、(注6)「過剰な」欲望を巧みに開拓させるように仕向けてくる。もちろん、消費者が身体を手軽に管理できる商品を資本が開発することは、資本の動きとして当然のことであろう。しかし、そのような「衛生グッズ」に対して、果たして人々が欲望を向けるのかという問題がある。生活の中に取り入れられた衛生観念に基づく商品には、確かに科学的根拠に基づく「使用価値」があるのだろうか。【⑤】しかし、限界生産性が飽和し、かつ消費者の欲望が飽和してくる社会では、その機能的な「使用価値」を広告宣伝の言説に利用したとしても、消費者の欲望は引き出されえない。このような社会において、資本は、消費者の「過剰な」欲望を創出する手段として、ブラックボックス化した衛生観念を「過剰な」言説に変換し、商品を通して【D】させようとする。

(注6) アドリアン・フォーティは、二十世紀前半のアメリカにおいて、「清潔の美学が家庭の風景の規範になる」と指摘し、資本のフロンティア

アとして、衛生と清潔が、商品のデザインや広告の中に巧みに取り入れられていることを指摘している。

おおむねのところ、清潔さの水準を高め、うえでは、商業のほうで衛生論者たち以上の成功をおさめた。「中略」真空掃除機、石鹼粉、洗濯機などは、すべて清潔さのより高い水準を達成するための新しい機会を生みだし、掃除を軽んじることと、とくにそれらが一点のしみやほこりをも排除するデザイン規範によって支えられたときには、いつそう野暮で許しがたいことにした。ほこりを、掃除によってのみ軽減しうる病気の原因と認めようとしたのは衛生改良家だったけれど、その観念を現実に変えたのは、ほかならぬ商業であり、製造業だったのである。  
〔傍点は引用者〕

フォーティはいくつかの「衛生グッズ」の広告を例示しているが、その中にあるコピーを見ると、資本が脅迫や進化といった新たなかつ「過剰な」欲望を引きだそうとしていることがわかる。例えば、フォーティが紹介している消毒洗剤ライゾールの広告には、「お化け屋敷に住みたいですか？」というコピーが書いてあり、その下には、「Y」という見出しの下、ライゾールの商品説明がなされている。また、ユーリカ真空掃除機の広告には、掃除機のセールスマンが家の玄関を訪れている写真の横に、「ようこそユーリカマン」「ユーリカマンは家庭衛生の新しい基準を運んできます」というコピーが添えられている。ここには、商品の機能や性能に対する必要性や欲望ではなく、「お化け」の存在という脅迫や、先進的な衛生概念を享受できるといった「過剰な」欲望を、商品を介して作り出す仕組みが存在している。

このような衛生グッズの普及は、身体の管理や制御といった「過剰な」欲望を人々から引き出したといえる。まさに、身体にかんする「政治学」は、身体にかんする「経済学」に取って代わったのである。現代の消費社会では、身体は、単に制御、管理できるという意味でのモノではなく、商品としてのモノと認識されざるを得ないのである。

〔阿部勘一「現代社会における身体と身体イメージ——「消費される」身体という観点から」(西山哲郎・谷本奈穂「編著」『身体化するメディア／メディア化する身体』所収) 風塵社〕

(注1) 亘明志——社会学者(一九四九—)。

(注2) デカルト——フランス出身の哲学者(一五九六—一六五〇)。

(注3) コンフリクト——対立。軋轢。

(注4) ジャン・ボードリヤール——フランスの哲学者、思想家(一九二九—二〇〇七)。

(注5) 佐伯啓思——経済学者、思想家(一九四九—)。

（注6）アドリアン・フォーティ——イギリスの建築史家（一九四八—）。

\*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の言葉の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は  ～  。

(ア) まつわる

- ① 付随する
- ② 帰着する
- ③ 起因する
- ④ 相当する
- ⑤ 由来する

(イ) 禁忌

- ① コスト
- ② タブー
- ③ ルール
- ④ リスク
- ⑤ エラー

(ウ) 野暮で

- ① 無難で
- ② 無精で
- ③ 無為で
- ④ 無情で
- ⑤ 無料で

問 2 空欄 A ～ D を補うのに最も適当な言葉を、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いて

A

D

はならない。解答番号は A・、B・、C・、D・。

- ① 発揮      ② 流布      ③ 創造      ④ 抑止      ⑤ 維持

問 3 空欄  を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 身体を持たずとも、身体となる  
 ② 身体と主体とを、明確に分離させる  
 ③ 身体を持ちながら、身体でもある  
 ④ 身体を物体とみなし、消費する  
 ⑤ 身体の所有者でも、観察者でもない

問 4 傍線部(1)「身体を消費すること、すなわち身体を意のままに制御することは、ある種必然なことだといえる」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 現代の消費社会では、消費者は個性的な衣服を身体にまとわせ、その身体によって表象される記号的なイメージを発信することに執心することになるが、それは「記号を消費する」ことを美徳とする社会の側からも要請されることだから。  
 ② 現代の消費社会では、消費者は商品を記号として消費するが、自分の個性を表現する場合においても、記号的な意味をもつ衣服を意図して身体にまとわせ、それによって表象されるイメージを個性として発信することになるから。  
 ③ 現代の消費社会では、身体を「モノ化」することが広く行われるようになるばかりか、身体を自分の個性を表現するための手段として「変工」し、一種の記号と化した身体をイメージとして消費するということも行われるようになるから。  
 ④ 現代の消費社会では、商品の記号的な意味に価値が見いだされるようになり、それは「モノ化」された身体においても同様であるが、消費者はそのような身体を意図的に用いることによって、自分の個性を表象するようになるから。  
 ⑤ 現代の消費社会では、消費者は自分の身体を一種の記号とみなし、それに様々な衣服をまとわせることによって個性を表現することになるが、そのためには、身体が消費者の所有物としてその支配のもとに置かれていなければならないから。

問 5 傍線部(2)「身体そのものを変形、加工させる『変工』という行為」とあるが、ここでの「変工」に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① 記号としての身体を「モノ化」することにより、そこに資本主義的な価値を与える近代に特有の行為である。
- ② 前近代的な呪術や儀礼から身体を解放することであり、その結果、身体は記号として扱われるようになる。
- ③ 身体を技術的に改良しようとする行為であり、身体が being として意識されるようになってはじめて可能になる。
- ④ 本来は「文化人類学的な主題」として、消費社会におけるモードとは異なる次元で考えられてきた行為である。
- ⑤ 内在化された資本主義的な欲望にもとづく行為であるが、「医療的身体変工」として行われるのが一般的である。

問 6 傍線部(3)「このこと」の指示内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 美容整形という身体の「変工」が、医療行為として認められるようになる可能性があること。
- ② 身体の「変工」技術を用いて可能になることが、ファッションのように消費の対象になること。
- ③ 「第二の皮膚」としてのファッションと、身体の「変工」が同一視されるようになること。
- ④ ピアッシングやタトゥーなどの「変工」が、「文化人類学的な主題」のもとに置かれること。
- ⑤ 身体を「変工」する技術が発展することによって、身体の「モノ化」がいつそう進むこと。

問 7 傍線部(4)「『過剰な』欲望を巧みに開拓させるように仕向けてくる」とあるが、このとき資本は具体的にどのような方法をとるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 手軽に携行できる「衛生グッズ」を新たに開発し流通させる。
- ② 衛生観念を普及させるための啓蒙活動を一般の人々に向けて行う。
- ③ 広告のコピーを巧みに利用して衛生観念をブラックボックス化する。
- ④ 「衛生グッズ」の「使用価値」に関する科学的根拠を明示する。

⑤ 商品デザインや広告を用いて清潔で衛生的であるようにたきつける。

問 8 空欄 Y を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① お化けが出てくるには？
- ② お化けに変身するには？
- ③ お化けを退治するには？
- ④ お化けを見るためには？
- ⑤ お化けと和解するには？

問 9 傍線部(5)「身体にかんする『政治学』は、身体にかんする『経済学』に取って代わった」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① かつて、身体のある方は国家によって決定され、一元的に管理されていたが、現代の消費社会では、身体はそうなくびきから解放され、資本主義的なファッションのモードに支配されているということ。
- ② かつて、国家による制御と管理のもとに置かれていた人々の身体は、政治学の対象として扱われたが、現代の消費社会では、身体は資本主義的な商品として位置付けられ、経済学的な主題とされているということ。
- ③ かつては、人々の身体のある方を国家が制御し、管理していたが、現代の消費社会では、資本が消費者の欲望を喚起し、そのことを通じて商品としての身体のある方を決定するようになっていくということ。
- ④ かつて、人々が身体にまとう衣服は国家的なモードによって制御、管理されていたが、現代の消費社会では、資本主義的なモードによって身体のある方やファッションが規制されるようになっていくということ。
- ⑤ かつては、国家が人々の身体を商品のように扱い、消費していたが、現代の消費社会では、国家に代わって資本が人々の身体を消費するだけでなく、新たな消費の対象を生み出しているということ。

問 10 次の一文が入るべき箇所を、本文中の【①】～【⑤】のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

【資本は、例えばマーケティングや広告宣伝活動を通して、消費者の欲望を開拓していく。】

問11 次のア～オについて、本文の内容と合致するものは①、合致しないものは②を選び、それぞれ記号で答えなさい。解答番号は

20。

ア 身体に外圧が加われれば、人間の生命は危機にさらされることになるが、その一方で、身体を「モノ化」し「変工」を行ってきたというのも事実である。そして、この間の矛盾は「文化人類学的な主題」となりうる。 16

イ 衛生上の目的から身体管理が必要になる場合、人々はそれを積極的に行おうとはしない。しかし、資本主義は消費者の衛生状態に対する欲望を引き出すことによって、その目的を果たすことを可能にする。 17

ウ 現代の消費社会における身体の「モノ化」という現象には二つの意味がある。その一つはbeingとして身体が存在することであり、もう一つはhavingとして身体は存在することである。 18

エ 資本主義経済が発達すると、人々の欲望を資本主義自身が作り出すようになっていく。その欲望が「ナルシシズム」と結びつけば、消費者は身体をも消費の対象とするであろうし、ひいては「変工」を行うようにもなる。 19

オ 消費社会では、衣服は「第二の皮膚」として身体を保護する機能をもつものであるよりも、個性を表現するための意味をもつものであると考えられるようになる。この意味で、衣服は記号として働くのである。 20